

— 原著 —

最近14年間における外来患者の臨床統計的観察

阿部哲也, 飯田明彦, 高木律男, 星名秀行
小野和宏, 鍛冶昌孝, 今井信行, 服部幸男
安島久雄, 大橋靖

新潟大学歯学部口腔外科学第二講座

(主任: 高木律男助教授)

(受付: 平成10年11月13日; 受理: 平成10年12月9日)

Clinico-statistical Observation of Outpatients

During Last 14 Years in Our Clinic

Tetsuya ABE, Akihiko IIDA, Ritsuo TAKAGI, Hideyuki HOSHINA,
Kazuhiro ONO, Masataka KAJI, Nobuyuki IMAI, Yukio HATTORI,
Hisao AJIMA, Yasushi OHASHI

*Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Niigata University School of Dentistry
(Director: Associate Prof. Ritsuo Takagi)*

Key Words : Clinico-statistical observation, Oral and Maxillofacial Surgery, Outpatients

Abstract : A clinico-statistical observation of outpatients over 14 years from 1983 to 1997, was conducted and the results were compared with our data that was previously reported in this journal, for the first 10 years from the establishment of our clinic.

The results were as follows:

1. New outpatients in this 14 year period totaled 15,415, 6,509 males and 8,690 females. Patients in their 20's were the most frequent and accounted for 21.3% of all patients.
2. The proportion of patients from other prefectures increased from 2.6% to 4.0%.
3. The proportion of patients referred to us by another medical or dental institution, including medical hospitals affiliated with our university, showed gradual increase over the 14 year period, accounting for 50% each year.
4. The average number of patients with temporomandibular disease (from 42 to 121) and jaw deformity (from 6 to 38) showed marked increases. The average number of tumor cases for year increased from 24 to 34. The number of patients with cleft lip and/or palate did not increase. The ratio of primary cases, however, increased from 37% to 65%. The data indicate the number of outpatients with oral and maxillofacial diseases increased. Thus, our clinic appears to function as a very important institution for Oral and Maxillofacial Surgery in Niigata district.

抄録: 1983年12月から1997年11月までの14年間に, 新潟大学歯学部第2口腔外科を受診した新来患者についての臨床統計的観察を行い, 本学会誌14巻2号に報告した開設以来10年間の結果と比較し, 以下の結果を得た。

1. 対象期間中における新来患者総数は, 15,415名で, 性別は, 男性6,509名(42.2%), 女性8,906名(57.8%), 年齢構成では, 20歳代が, 21.3%と最も多く, 開設後10年に比べ大きな変化は認められなかった。
2. 居住地別患者数をみると県外からの患者の割合が4.0%(開設後10年: 2.6%)と増加していた。
3. 紹介機関別頻度では, 医学部附属病院を含む他の医療機関からの紹介患者の割合が前回調査を上回る40%台を維持し, 最近では50%を超える年も認められ増加傾向を示した。
4. 疾患別年平均患者数では顎関節疾患が121例(開設後10年: 42例), 顎変形症が38例(同: 6例)と著明に増加してお

り、腫瘍も34例(同:24例)と増加を認めた。裂奇形は、49例と患者数に大きな変化はないものの、このうちで一次症例の占める割合は65%(同:37%)と高くなっていた。以上、口腔外科的疾患の占める割合が、増加しており、本院が新潟地区における口腔外科の基幹病院として重要な役割を果たしていることが示唆された。今後更に臨床研究を進展させ、口腔外科医療の向上に努める所存である。

結 言

私たちは、過去に当科開設後10年間における外来患者の臨床統計的観察¹⁾を行った。その結果、嚢胞、顎関節疾患で患者の増加が著しく、奇形、変形症、腫瘍、外傷、粘膜疾患ならびに唾液腺疾患でも年度を追うにつれ、増加の傾向が認められた。そこでそれ以降は、奇形、腫瘍(含嚢胞)、顎関節疾患、顎変形症の4つの研究グループを核として臨床研究をすすめて、口腔外科医療の向上に努めてきた。今回、私たちの取り組みが患者の動向にどのような影響を与えているか調査し、今後の方針を決定する一助とするために最近14年間の新来患者の臨床統計的観察を行い、開設後10年の結果と比較検討を行ったので報告する。

対象および方法

1983年12月から1997年11月までの14年間に、当科外来を受診した新来患者は総数15,415名である。これらにつ

いて、性、年齢構成、年次推移、来院患者の居住地、紹介機関、及び、疾患内容について調査した。また、その結果を当科が開設された1973年12月から1983年11月までの10年間における調査結果(以下;開設後10年)¹⁾と比較検討した。尚、前回腫瘍の中に含めた刺激性線維腫は、今回の検討では、粘膜疾患として分類した。

結 果

1. 性、年齢別患者数

性別では、男性6,509名、女性8,906名であった。年齢別では、生後数日から90歳代にわたって広く分布し、20歳代が最も多く、以下高齢になるに従って患者数は少なくなっていた(図1)。これは、開設後10年と、同様の傾向であった。

2. 年次別新来患者数

年次別患者数の推移についてみると、1984年12月から1985年11月までの1年間で866名と最低を示し、最高は1996年次の1,427名で、年次平均(各年次の平均)は、1,101

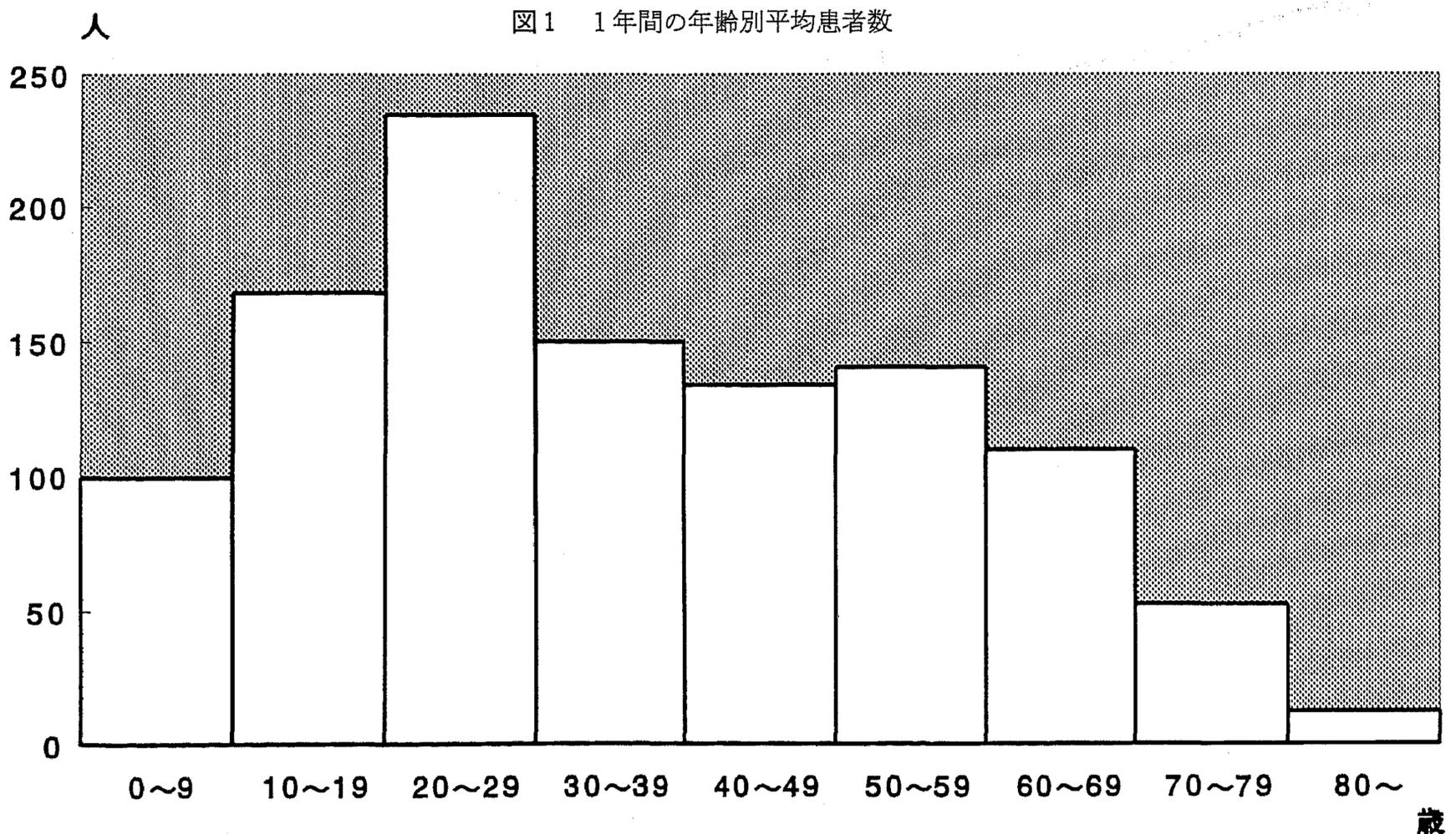


表1 年次別新来患者数

性別	年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計
男性		508	377	457	409	531	433	529	448	563	409	487	379	575	404	6,509
女性		596	489	555	542	629	587	759	604	790	599	720	599	852	585	8,906
合計		1,104	866	1,012	951	1,160	1,020	1,288	1,052	1,353	1,008	1,207	978	1,427	989	15,415

表2 地域別患者数 (人)

新潟県内	市内	7,529
合計 14,803	市外	7,274
新潟県外	山形県	295
合計 612	福島県	64
	東京都	39
	秋田県	29
	神奈川県	27
	千葉県	22
	埼玉県	21
	富山県	21
	群馬県	16
	青森県	12
	その他	66
	計	15,415

名であった(表1)。開設後10年では、年間平均1,244名であり、患者数は僅かに減少していた。

3. 地域別患者数

来院患者の居住地別患者数をみると、新潟県内からの患者が圧倒的に多く、全体の96%を占めるものの、広く新潟県外からも612名の患者が来院していた(表2)。県外からの患者の占める割合は4.0%で、開設後10年の2.6%から増加が認められた。県外居住者の内訳は山形県が295名と最も多く、以下、福島県64名、東京都39名、秋田県29名、神奈川県27名、千葉県22名の順であった。また新潟県内のうち新潟市内の患者は7,529名、新潟市外の患者は7,274名であった(表2)。

4. 紹介元機関別患者頻度

紹介元機関別患者頻度の年次推移をみると、本学医学部附属病院を含む他の医療機関からの紹介患者の割合は、常に40%台を維持し、95年、97年には50%を越えており、増加傾向を認めた。紹介元の機関としては、各年次とも開業歯科医院が最も多く、最近では30%以上を占め増加傾向が認められた(図2)。前回の調査によると、1977年においては新来患者の紹介率は、13%に過ぎず、その後、紹介率は上昇を続け1983年次には38%となっていた。今回の調査結果は、その傾向が引き続き継続していることを示している。

5. 疾患別頻度

総数15,415名中、歯及び歯周組織疾患が最も多く5,412例(35.1%)、以下炎症2,634例(17.1%)、顎関節疾患1,699例(11.0%)、嚢胞1,093例(7.1%)、奇形909例(5.9%)、外傷810例(5.2%)、粘膜疾患701例(4.5%)、変形症535例(3.5%)、腫瘍472例(3.1%)、神経疾患151例(1.0%)、唾液腺疾患119例(0.8%)、歯科心身症262例(1.7%)、異常を認めず198例(1.3%)、その他420例(2.7%)であった(表3)。この結果を開設後10年の結果と比較すると、歯及び歯周組織疾患の占める割合は、52.0%から35.1%へと減少している一方で、顎関節疾患

は3.3%から11.0%、顎変形症は、0.5%から3.5%、腫瘍は1.9%から3.1%と著明な増加が認められた。また、嚢胞、粘膜疾患も、それぞれ、5.0%から7.1%、3.1%から4.5%へと増加していた。

6. 各種疾患別観察

1) 歯および歯周組織疾患

歯および歯周組織疾患5,412例の各年次における頻度は、新来患者数の35%前後を占め、14年間ほぼ同じ割合を占めていた(表3)。その内訳は、う蝕及び根尖性歯周炎が37.9%と最も多く、以下、埋伏歯・過剰歯34.6%、辺縁性歯周炎14.6%、転位歯(便宜抜歯を含む)8.7%、乳歯晩期残存1.3%、その他2.9%の順であり(表4)、開設後10年に比し、う蝕及び根尖性歯周炎の占める割合が、61.0%から37.9%へと減少し、逆に埋伏歯・過剰歯の占める割合が12.7%から34.6%へと著明に増加していた。

2) 炎症

炎症症例総数2,634例の年次別頻度は、各年次とも新来患者の15~20%を占め、14年間ほぼ同じ割合であった(表3)。その内訳は、智歯周囲炎が47.1%と半数近くを占め、以下、歯槽骨炎15.7%、下顎骨炎13.9%、歯性上顎洞炎7.1%、上顎骨炎6.6%の順で、これらを合計すると90.4%となり、いわゆる歯性感染症が、大多数を占めていた(表5)。これは、開設後10年と同様の傾向であった。

図2 紹介元機関別頻度年次推移

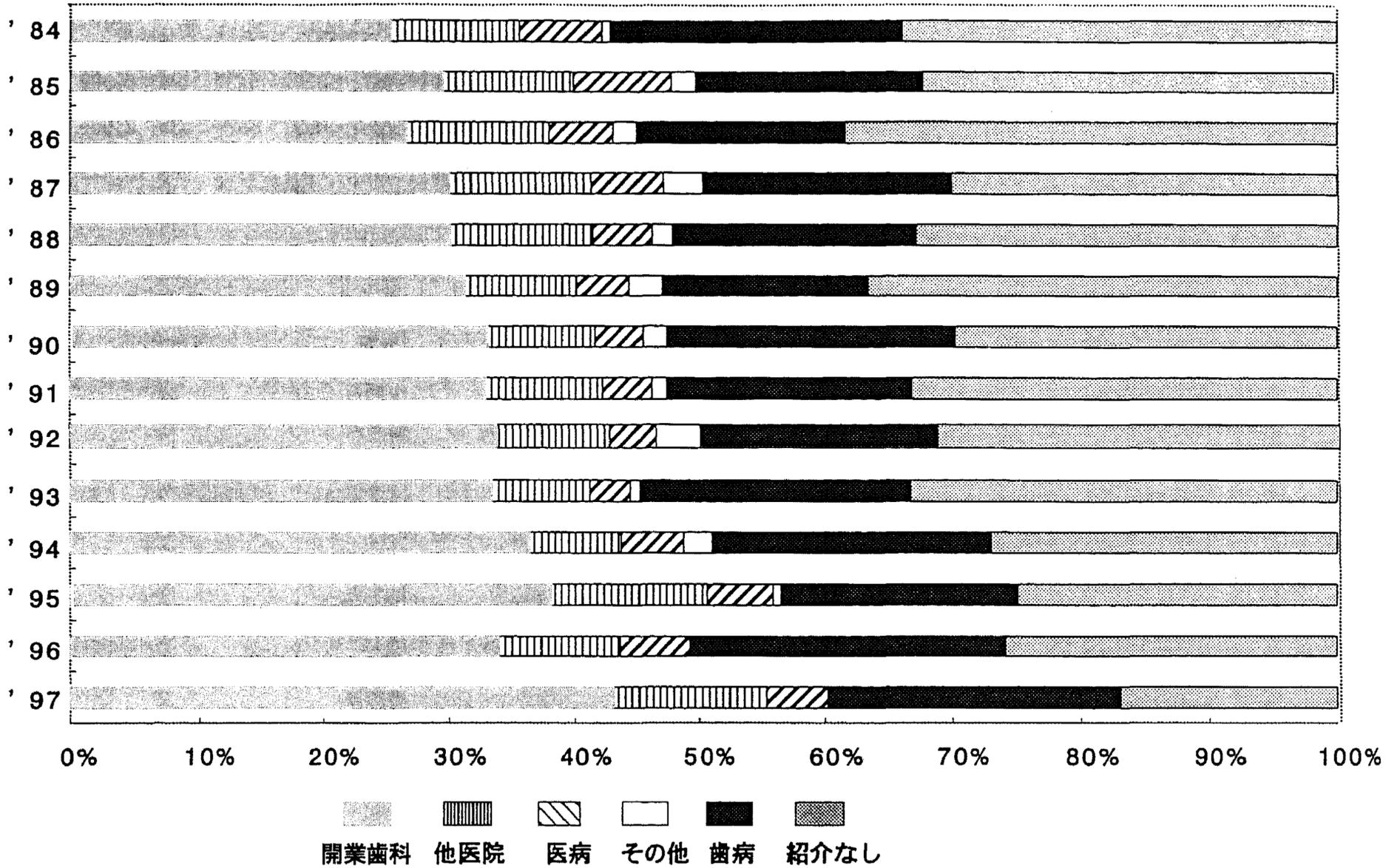


表3 新来患者の疾患別年次別頻度

疾患分類	年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	疾患別合計
歯及び歯周疾患		438 (39.7)	324 (37.4)	351 (34.7)	290 (30.5)	405 (34.9)	357 (35.0)	487 (37.8)	368 (35.0)	435 (32.2)	354 (35.1)	434 (36.0)	307 (31.4)	516 (36.1)	346 (35.0)	5,412 (35.1)
奇形		66 (6.0)	56 (6.5)	66 (6.5)	70 (7.4)	76 (6.6)	77 (7.5)	78 (6.1)	52 (4.9)	88 (6.5)	61 (6.1)	45 (3.7)	67 (6.9)	50 (3.5)	57 (5.8)	909 (5.9)
(裂奇形)		52 (4.7)	45 (5.2)	52 (5.1)	48 (5.0)	57 (4.9)	60 (5.9)	68 (5.3)	49 (4.7)	60 (4.4)	36 (3.6)	30 (2.5)	51 (5.2)	33 (2.3)	42 (4.2)	683 (4.4)
炎症		203 (18.4)	146 (16.9)	174 (17.2)	178 (18.7)	194 (16.7)	176 (17.3)	241 (18.7)	178 (16.9)	251 (18.6)	137 (13.6)	205 (17.0)	189 (19.3)	211 (14.8)	151 (15.3)	2,634 (17.1)
外傷		70 (6.3)	40 (4.6)	61 (6.0)	52 (5.5)	88 (7.6)	57 (5.6)	56 (4.4)	54 (5.1)	75 (5.5)	31 (3.1)	63 (5.2)	38 (3.9)	80 (5.6)	45 (4.6)	810 (5.2)
嚢胞		102 (9.2)	72 (8.3)	96 (9.5)	87 (9.1)	77 (6.6)	82 (8.0)	79 (6.1)	57 (5.4)	57 (4.2)	74 (7.3)	64 (5.3)	69 (7.1)	106 (7.4)	71 (7.2)	1,093 (7.1)
腫瘍		26 (2.4)	20 (2.3)	35 (3.4)	29 (3.0)	34 (2.9)	33 (3.2)	34 (2.6)	28 (2.7)	41 (3.0)	28 (2.8)	49 (4.1)	32 (3.3)	49 (3.4)	34 (3.4)	472 (3.1)
粘膜疾患		51 (4.6)	35 (4.0)	52 (5.1)	42 (4.4)	54 (4.7)	53 (5.2)	56 (4.4)	46 (4.4)	60 (4.4)	42 (4.1)	61 (5.0)	47 (4.8)	70 (4.9)	32 (3.2)	701 (4.5)
顎関節疾患		73 (6.6)	79 (9.1)	87 (8.6)	115 (12.1)	103 (8.9)	105 (10.3)	124 (9.6)	129 (12.3)	180 (13.3)	149 (14.8)	145 (12.0)	120 (12.3)	166 (11.6)	124 (12.5)	1,699 (11.0)
顎変形症		6 (0.5)	18 (2.1)	18 (2.1)	27 (2.8)	41 (3.5)	26 (2.5)	26 (2.0)	46 (4.4)	67 (5.0)	42 (4.1)	54 (4.5)	46 (4.7)	74 (5.2)	44 (4.5)	535 (3.5)
唾液腺疾患		15 (1.4)	6 (0.7)	9 (0.9)	10 (1.1)	11 (1.0)	11 (1.1)	6 (0.5)	9 (0.8)	10 (0.7)	11 (1.1)	4 (0.3)	3 (0.3)	6 (0.4)	8 (0.8)	119 (0.8)
神経疾患		8 (0.7)	15 (1.7)	13 (1.3)	11 (1.2)	12 (1.0)	6 (0.6)	10 (0.8)	12 (1.1)	8 (0.6)	7 (0.7)	11 (0.9)	15 (1.5)	14 (1.0)	9 (0.9)	151 (1.0)
歯科心身症		12 (1.1)	11 (1.3)	10 (1.0)	7 (0.7)	20 (1.7)	11 (1.1)	32 (2.5)	27 (2.6)	20 (1.5)	19 (1.9)	37 (3.1)	15 (1.5)	11 (0.8)	30 (3.0)	262 (1.7)
異常を認めず		11 (1.0)	17 (2.0)	14 (1.4)	19 (2.0)	19 (1.6)	6 (0.6)	25 (1.9)	21 (2.0)	14 (1.0)	17 (1.7)	6 (0.5)	8 (0.8)	4 (0.3)	17 (1.7)	198 (1.3)
その他		23 (2.1)	27 (3.1)	26 (2.6)	14 (1.5)	26 (2.3)	20 (2.0)	34 (2.6)	25 (2.4)	47 (3.5)	36 (3.6)	29 (2.4)	22 (2.2)	70 (5.0)	21 (2.1)	420 (2.7)
年次合計		1,104	866	1,012	951	1,160	1,020	1,288	1,052	1,353	1,008	1,207	978	1,427	989	15,415

注：()内は%を示す

表4 歯および歯周疾患患者の年次別頻度

分類	年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
う蝕および根尖性歯臭炎		225	171	165	140	176	137	184	132	131	102	141	90	162	93	2,049	37.9
辺縁性歯周炎		92	60	70	45	57	49	48	41	49	53	62	43	83	40	792	14.6
埋伏歯・過剰歯		67	72	75	76	130	120	182	147	196	135	182	134	190	164	1,870	34.6
転位歯 (含む便宜抜歯)		28	12	25	24	30	26	56	30	37	49	32	31	61	31	472	8.7
乳歯晚期残存		17	4	4	2	4	3	10	7	9	2	4	0	3	3	72	1.3
その他		9	5	12	3	8	22	7	11	13	13	13	9	17	15	157	2.9
合計		438	324	351	290	405	357	487	368	435	354	434	307	516	346	5,412	100.0

3) 奇形

奇形症例909例の年次別推移をみると、年間新来患者総数の6%前後でほぼ一定した割合を占めていた。その内訳は唇顎口蓋裂が35.8%と最も多く、以下、口蓋裂18.2%、唇(顎)裂13.9%、粘膜下口蓋裂7.1%と、裂奇形が75%を占めており(表6)、開設後10年と比しほぼ同様の傾向であった。

4) 外傷

外傷症例総数810例の年次別推移をみると、ほぼ4~6%の間で推移し、各年次で一定した割合を占めていた(表3)。その内訳は、歯の外傷が最も多く33.2%、以

下、軟組織外傷29.6%、下顎骨骨折22.6%、上顎骨骨折5.2%、歯槽骨骨折3.6%、上下顎骨折2.1%、その他3.7%の順であり(表7)、開設後10年とほぼ同様の傾向であった。

5) 嚢胞

嚢胞症例総数1,093例の年次別頻度の推移をみると、最低は1992年次の4.2%で、最高は1986年次の9.5%であり、最近では7%台で安定している(表3)。その内訳は、歯根嚢胞が39.6%と最も多く、以下、粘液嚢胞21.2%、術後性上顎嚢胞16.1%、含歯性嚢胞6.1%、下顎嚢胞3.4%、上顎嚢胞3.0%、ガマ腫2.3%、その他8.3%の順であり(表

表5 炎症症例の年次別頻度

分類 \ 年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
智歯周囲炎	91	67	69	62	75	68	121	83	136	71	94	111	122	72	1,242	47.1
歯槽骨炎	43	20	29	50	40	31	50	42	34	21	29	20	1	3	413	15.7
上顎骨炎	15	14	11	14	14	15	18	10	12	5	21	11	0	13	173	6.6
下顎骨炎	24	20	35	22	39	25	22	19	20	16	25	27	34	37	365	13.9
歯性上顎洞炎	16	16	11	16	9	14	11	11	12	4	13	9	34	12	188	7.1
リンパ節炎	4	3	9	2	2	5	4	9	9	4	4	5	11	7	78	3.0
唾液腺炎	5	4	5	6	3	7	4	1	6	3	12	4	4	3	67	2.5
口腔底炎	2	1	0	1	6	0	2	1	0	1	1	0	0	0	15	0.6
扁桃周囲炎	0	1	0	1	1	2	3	0	1	0	0	2	0	0	11	0.4
蜂窩織炎	1	0	0	0	0	2	1	1	0	1	0	0	4	3	13	0.5
放線菌症	0	0	0	0	1	2	3	0	2	1	3	0	0	0	12	0.4
その他	2	0	5	4	4	3	2	1	19	10	3	0	1	1	57	2.2
合計	203	146	174	178	194	176	241	178	251	137	205	189	211	151	2,634	100.0

表6 奇形症例の年次別頻度

分類 \ 年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
唇(顎)裂	7	7	9	7	10	7	11	13	9	7	7	6	9	17	126	13.9
唇顎口蓋裂	26	24	25	22	25	35	33	27	25	20	14	24	9	16	325	35.8
口蓋裂	12	12	13	13	16	14	19	7	20	6	3	15	9	7	166	18.2
粘膜下口蓋裂	6	2	5	6	6	4	5	2	6	3	6	6	6	2	65	7.1
その他	15	11	14	22	19	17	10	3	28	25	15	16	17	15	227	25.0
合計	66	56	66	70	76	77	78	52	88	61	45	67	50	57	909	100.0

表7 外傷症例の年次別頻度

分類 \ 年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
上顎骨骨折	4	3	1	1	4	1	2	6	0	3	3	5	7	2	42	5.2
下顎骨骨折	20	12	18	12	24	13	8	11	14	6	13	8	15	9	183	22.6
上下顎骨骨折	1	1	7	0	1	2	1	1	1	0	0	0	1	1	17	2.1
歯槽骨骨折	1	4	0	2	4	2	3	2	8	1	2	0	0	0	29	3.6
歯の外傷	25	8	19	18	25	17	24	15	22	13	25	13	32	13	269	33.2
軟組織外傷	18	12	14	17	27	18	14	17	28	7	19	11	19	19	240	29.6
その他	1	0	2	2	3	4	4	2	2	1	1	1	6	1	30	3.7
合計	70	40	61	52	88	57	56	54	75	31	63	38	80	45	810	100.0

8), 開設後10年と比し大きな変化は認められなかった。尚, 病理診断不明のものについては, その発生部位により, 上顎嚢胞, 下顎嚢胞として分類した。

6) 顎関節疾患

顎関節疾患総数1,699例の年次別頻度の推移をみると, 1984年次では年間新来患者総数の6.6%を占めるに過ぎなかったが, 1997年次においては12.5%を占めるに至っており, 増加傾向が認められた(表3)。その内訳は, 顎関節症が96%と大多数を占め, 以下, 顎関節脱臼2.1%, 顎関節炎0.5%, 顎関節強直症0.4%, その他1.0%であり, 開設後10年と同様の傾向であった。

7) 腫瘍

腫瘍総数472例の年次別頻度推移をみてみると, 各年次ともほぼ3%前後で推移していた(表3)。その内訳は, 癌腫が最も多く腫瘍全体の40.0%を占めており, 以下, 良性非歯原性腫瘍37.3%, 良性歯原性腫瘍19.1%, 肉腫2.5%, 悪性黒色腫などが1.1%の順であった(表9)。ま

た, 歯原性腫瘍90例の内訳は, 歯牙腫43例(47.8%), エナメル上皮腫21例(23.2%), セメント質腫19例(21.1%), その他7例(7.8%)であった(表10)。また, 非歯原性腫瘍の内訳は, 血管腫が最も多く58例(33.0%)で, 以下, 乳頭腫32例(18.2%), 多形性腺腫18例(10.2%), 脂肪腫9例(5.1%), リンパ管腫4例(2.3%), 神経系腫瘍2例(1.1%), その他53例(30.1%)であった(表11)。腫瘍症例の内訳に関しても, 開設後10年と比し概ね同様の傾向を示した。

8) 粘膜疾患

粘膜疾患総数701例の年次別頻度推移をみると, 各年次とも4~5%でほぼ一定の割合を占めていた(表3)。その内訳は, エプーリス23.0%, 以下, 口内炎21.0%, 扁平苔癬11.5%, 舌炎9.6%, 白板症9.1%, 刺激性線維腫5.1%の順であった(表12)。開設後10年と比較すると, 粘膜疾患の占める割合は, 3.1%から4.5%へと増加が認められた。しかし, その内訳については, 大きな変化は,

表8 嚢胞症例の年次別頻度

分類 \ 年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
歯根嚢胞	36	30	46	37	30	29	29	18	22	37	34	18	35	32	433	39.6
術後性上顎嚢胞	18	12	15	8	12	15	11	8	13	10	12	11	18	13	176	16.1
含歯性嚢	3	9	7	7	3	6	1	3	5	9	2	5	4	3	67	6.1
上顎嚢胞	5	0	0	0	7	1	0	2	0	1	1	7	9	0	33	3.0
下顎嚢胞	10	0	0	0	4	1	5	0	2	3	0	7	4	1	37	3.4
粘液嚢胞	20	13	16	26	13	19	23	18	13	9	11	15	22	14	232	21.2
ガン腫	2	2	3	1	2	4	1	4	0	0	0	2	4	0	25	2.3
その他	8	6	9	8	6	7	9	4	2	5	4	4	10	8	90	8.3
合計	102	72	96	87	77	82	79	57	57	74	64	69	106	71	1093	100.0

表9 腫瘍症例の年次別頻度

分類 \ 年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
良性歯原性	5	4	6	5	2	9	7	4	7	10	9	8	11	3	90	19.1
良性非歯原性	9	7	17	10	17	9	11	10	17	7	25	11	14	12	176	37.3
癌腫	11	7	8	13	14	15	16	13	15	11	15	12	22	17	189	40.0
肉腫	1	1	3	1	1	0	0	1	2	0	0	0	1	1	12	2.5
悪性黒色腫など	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	5	1.1
合計	26	20	35	29	34	33	34	28	41	28	49	32	49	34	472	100.0

表10 良性歯原性腫瘍の年次別頻度

分類 \ 年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
エナメル上皮腫	0	1	2	1	0	2	1	0	2	4	1	3	3	1	21	23.2
歯牙腫	3	3	3	2	2	4	5	3	4	1	5	2	4	2	43	47.8
セメント質腫	1	0	1	2	0	2	1	1	0	3	2	3	3	0	19	21.1
その他	1	0	0	0	0	1	0	0	1	2	1	0	1	0	7	7.8
合計	5	4	6	5	2	9	7	4	7	10	9	8	11	3	90	100.0

認められなかった。

9) 唾液腺疾患

唾液腺疾患は、119例(0.8%)を占め、炎症、嚢胞、腫瘍との重複例を含めると、451例(2.9%)となる。いずれにしても、年次別推移をみると若干の増減はあるも

の、ほぼ一定の割合で推移していた(表3)。その内訳は、粘液嚢胞46.3%、唾液腺炎15.5%、唾石症12.9%、シェーグレン症候群を含む口腔乾燥症12.6%、ガン腫7.1%の順であった(表13)。開設後10年と比較すると、炎症、嚢胞、腫瘍との重複例を含めた割合は、1.6%から

表11 良性非歯原性腫瘍の年次別頻度

分類	年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
血管腫		2	1	6	5	7	6	4	1	4	2	4	4	3	9	58	33.0
乳頭腫		1	1	2	1	4	1	2	4	2	3	2	4	4	1	32	18.2
多形性腺腫		3	1	0	0	0	0	0	0	4	0	6	0	4	0	18	10.2
脂肪腫		0	2	0	0	0	0	0	1	2	2	2	0	0	0	9	5.1
リンパ管腫		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	4	2.3
神経系腫瘍		0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1.1
その他		3	1	8	4	5	2	5	4	5	0	10	2	2	2	53	30.1
合計		14	7	26	11	22	11	12	12	18	7	25	14	14	12	176	100.0

表12 粘膜疾患症例の年次別頻度

分類	年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
エプーリス		13	4	7	3	6	16	10	10	6	10	22	19	21	14	161	23.0
口内炎		11	10	15	8	14	8	12	15	12	5	14	7	11	5	147	21.0
扁平苔癬		8	4	5	3	4	4	9	3	11	10	6	3	7	4	81	11.5
舌炎		4	4	6	6	4	6	7	6	6	2	5	2	8	1	67	9.6
白板症		3	1	3	2	5	5	6	3	6	8	7	6	6	3	64	9.1
刺激性線維腫		5	7	9	1	5	2	1	2	1	0	0	3	0	0	36	5.1
口唇炎		1	2	3	6	3	1	0	1	2	0	0	1	0	0	20	2.9
地図状舌		0	1	0	1	2	2	1	0	1	1	0	2	1	0	12	1.7
ポリープ		0	0	0	1	3	2	0	0	4	0	0	0	0	0	10	1.4
色素沈着		4	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8	1.1
慢性再発性アフタ		0	0	0	3	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	6	0.9
天疱瘡		0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0.3
その他		2	1	2	8	7	6	10	4	9	6	7	4	16	5	87	12.4
合計		51	35	52	42	54	53	56	46	60	42	61	47	70	32	701	100.0

表13 唾液腺疾患症例の年次別頻度

分類	年次	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	合計	%
唾石症		5	3	2	6	6	5	2	4	6	5	2	3	6	3	58	12.9
唾液腺炎*		5	4	5	6	3	7	4	1	6	3	12	4	7	3	70	15.5
粘液嚢胞*		19	13	16	26	13	19	23	19	0	0	9	15	23	14	209	46.4
ガン腫*		4	2	3	1	2	4	1	4	2	1	2	2	4	0	32	7.1
多形性腺腫*		3	1	0	0	0	0	0	0	4	0	6	0	4	0	18	4.0
Wartin 腫瘍*		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.2
癌腫*		1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.4
口腔乾燥症**		9	3	7	2	5	6	4	5	4	6	1	0	0	5	57	12.6
その他		1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0.9
合計		46	26	34	41	29	41	34	34	22	15	32	24	44	25	451	100.0

注1)* ; 炎症, 嚢胞, 腫瘍と重複

注2)** ; シェーグレン症候群を含む

2.9%へと増加していたが、その内訳については同様の傾向であった。

10) 神経疾患

神経疾患総数151例の年次別頻度をみると、各年次とも1%前後ではほぼ同じ割合を示していた。その内訳は、三叉神経痛41.7%、非定型顔面痛16.6%、顔面神経麻痺15.9%、三叉神経知覚麻痺10.6%の順であり、開設後10年に比し、大きな変化は、認められなかった。

11) 歯科心身症、異常認めず、その他

歯科心身症が14年間で、262例、有郭乳頭などの正常組織に対しての精査依頼を含めた異常を認めずが198例、外骨症が86例みられ、以下、少数ではあるが、これまでの分類に含まれるような明らかな原因の認められないものとして、構音障害、薬物アレルギー、金属アレルギー、血腫などがみられた。

考 察

私達は過去に当科開設後10年間の外来患者の臨床統計的観察¹⁾を行った。今回は、最近14年間の新来患者の臨床統計的観察を行い、開設後10年の結果と比較検討を行った。

新来患者総数は15,415名に達しており、疾患の種類は多岐に亘っていた。これら新来患者数の年次推移をみると、第一口腔外科と分担した平日の新患担当日が隔年で2日あるいは3日と決められているため、1年ごとに患者数に増減がみられるものの年次別の患者数に大きな変化は認められなかった。年平均患者数は、1,101名と開設後10年に比しわずかに減少傾向を示した。この点に関しては、新潟県の人口10万人あたりの従事歯科医師数が今回調査の1996年末で74.3人²⁾であり、前回調査の1982年末の48.7人³⁾に比し、約1.5倍に増加していることを考え合わせると、患者数の減少率は少ないものと思われる。尚、1年間の患者数について他の歯科大学の附属病院の報告を見てみると、鹿児島大学の報告⁴⁾によれば、第2口腔外科が増設された後の1983年では、1診療科として667名であり、一方、松本歯科大学第二口腔外科⁵⁾が、開設後4年目の1977年で、649名であった。

新来患者のうち本学医学部附属病院を含む医療機関からの紹介患者の占める割合は、40%台を維持し、最近では、50%をこえる年もでてきており増加傾向を示していた。患者の紹介率について、口腔外科診療を主体とする他の施設の報告を見ると、兵庫県成人病センター⁶⁾が59%と最も高く、以下、恵佑会札幌病院⁷⁾32%、国立栃木病院⁸⁾28%、市立島田病院⁹⁾18%となっていた。これらの医療機関についてはその詳細は不明であるが、今回の当科の調査では、歯学部附属病院内の他科からのものは紹介患者に含めず、医学部附属病院及び他の医療機関から、

紹介状を持参してきた患者のみを紹介患者として集計した。従って、単純には、比較できないものの、全国的に見ても当科の患者の紹介率は、高い部類に入ると推察される。

次に疾患内容についてみてみると、歯および歯周組織疾患の占める割合は、全体の35.1%と、開設後10年の52.0%から減少していた。一方、顎関節疾患は3.3%から11.0%、顎変形症は0.5%から3.5%、腫瘍は1.9%から3.1%へとそれぞれ著明な増加が認められ、その他、嚢胞、粘膜疾患など、いわゆる、口腔外科の高度な専門知識や技術の要求される疾患の割合の増加が顕著であった。また、歯および歯周組織疾患の内容についてみても、う蝕及び根尖性歯周炎の占める割合は減少し、逆に埋伏歯、過剰歯の占める割合が、増加しており、いわゆる歯科的疾患の占める割合が減少し、口腔外科的疾患の占める割合が増加する傾向が明確に認められた。このことは、前述した新来患者の紹介率の上昇と相まって、当科の口腔外科専門医療機関としての地域医療に占める重要性を示唆するものと思われる。

さらに、当科が重点的に取り組んできた4つの疾患について、開設後10年と最近14年での年次平均患者数を比較してみると、顎関節疾患については42例から121例、顎変形症については6例から38例と著明な増加を認め、また腫瘍についても24例から34例と増加を認めた。奇形については、大半が裂奇形であり、58例から49例と患者数に大きな変化は認められないものの、一次症例の占める割合は37%から65%へと著明に増加が認められた。また、居住地別患者数についても、県外患者の占める割合は、開設後10年の2.4%から4.0%へと増加が認められた。これらの結果については、日常臨床での診療態度の他、当科開設以来1997年末までに学会発表878題、講演会を70回行っており、このような多方面へのアピール、更にこの間の診療を通して、指導医3名、認定医7名が育成されたことも相まっただけの成果と考えられた。以上、今回の結果から、当科が口腔外科専門医療機関として果たすべき役割は、益々大きくなってきていると思われる。今後さらに、臨床研究を進め、口腔外科医療の向上に努める考えである。

結 語

今回、私達は、第2口腔外科の最近14年間の外来患者について臨床統計的観察を行った。その結果、紹介患者の占める割合の増加、口腔外科の専門的知識や技術を要する疾患の割合の増加が認められ、当科の口腔外科専門医療機関としての重要性が増していることを伺わせた。今後更に臨床研究を発展させ、口腔外科医療の向上に努める考えである。

引用文献

- 1) 星名秀行, 大橋 靖, 染矢源治, 阿部正樹, 水谷英守, 五十嵐一男, 渡辺恒久, 高木律男: 新潟大学歯学部第2口腔外科開設後10年間における外来患者の臨床統計的観察. 新潟歯学会歯誌, 14:147-157, 1984.
- 2) 厚生省大臣官房統計情報部編: 医師・歯科医師・薬剤師調査. 平成8年版, 54-55頁, 厚生統計協会, 1998.
- 3) 厚生省大臣官房統計情報部編: 医師・歯科医師・薬剤師調査. 昭和59年版, 44-45頁, 厚生統計協会, 1986.
- 4) 三村 保, 大枝直樹, 田中 勉, 吉嶺真一郎, 木脇雅子, 宅間正次: 鹿児島大学歯学部口腔外科学第2講座開設後3年間の患者の臨床統計. 日口外誌, 30:1731-1735, 1981.
- 5) 待田順治, 山岡 稔, 小松正隆, 山本一郎, 梅津 彰, 伊吹 薫, 久枝健二: 松本歯科大学第2口腔外科における来院患者の検討. 松本歯学 4:27-37, 1978.
- 6) 赤澤 登, 久我雅則, 横尾 聡, 高橋伸彰, 島田 桂吉: 兵庫県立成人病センター口腔外科開設後2年間の患者の臨床統計的考察(抄). 日口外誌, 36:1981, 1990.
- 7) 江口克巳, 栃原義之, 松井俊明, 上田倫弘, 中嶋頼俊, 山下徹郎: 恵佑会札幌病院歯科口腔外科開設以来7年間の外来患者の臨床統計的検討. 北海道歯誌, 18:42-48, 1997.
- 8) 富田汪助, 島田紀夫, 岸本一夫: 国立栃木病院歯科口腔外科の最近3年6ヶ月間の間者の臨床統計的観察(抄). 日口外誌, 30:2183, 1984.
- 9) 服部 徹, 北島 正, 内藤講一: 市立島田市民病院における初診患者動態(抄). 日口外誌, 34:2944, 1988.